

「子どもの社会力」

門脇 厚司氏

●PROFILE

門脇厚司（かどわき・あつし）
筑波学院大学学長。1940年生まれ。東京教育大学大学院教育学研究科博士課程修了。日本教育社会学会会長、日本教育学会常任理事などを歴任。日本の若者や子どもの人間形成過程に関する研究を行うかたわら、学校づくり、遊び場づくり、地域づくりなどにも積極的に参画。著書に『子どもの社会力』『〈大人〉の条件―「社会力」を問う』（ともに岩波書店）、『学校の社会力』『親と子の社会力』（ともに朝日新聞社）など。

筑波大学（現在、筑波学院大学）の門脇です。今日は設立総会にお招きいただき、また私が日頃、書いたり申し上げたりしてきたことをお聞きいただける機会をつくっていただいたことを大変ありがたく、また光栄にも思っております。

さて、午前中の講演やシンポジウムをうかがっていて、私の感じたことを率直に申し上げますと、「人間が社会的である」ということに対する認識に大きなズレがあるのではないかと感じました。とりわけ文系と理系のギャップはまだまだ大きく、この大きな溝をいかに縮めていくかが、今後、極めて重要になるではないかと思いました。

それから、携帯電話やテレビ、テレビゲームについての議論もありましたが、こうしたテーマについては世代ギャップがあって、価値観というか見方が相当違うなと思って聞いておりました。

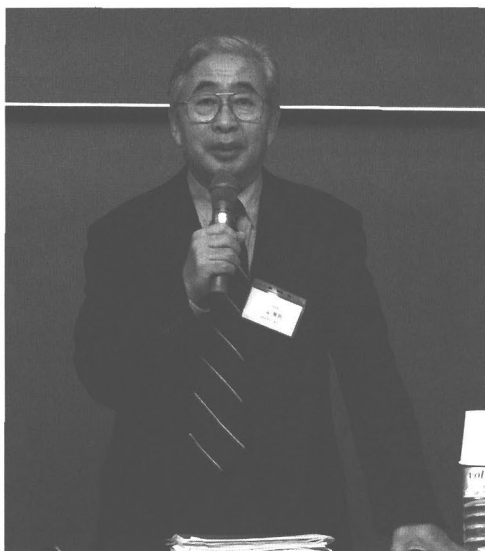
それで、予定を変更して、そちらに焦点を合わせて話そうかなとも考えたのですが、まずは、あらかじめ本日お話ししようと考えてきた話題からお話しさせていただきます。

変わってきた子ども認識

今日、こうして「子ども学会」が設立されたわけですが、すでに10年ぐらい前に「子ども社会学会」が設立されていますし、3年ぐらい前には「青少年育成学会」や「日本赤ちゃん学会」がスタートしています。赤ちゃん学会に入っている社会学者は、私だけではないかと思います。それから、現在、東京工業大学の仙田先生が中心になって、「子ども環境学会」を来年の春に立ち上げる準備が進んでおります。

そんな形で、このところ子どもに関する科学的な研究を行うことを目的とした学会が続々と設立されているわけですが、これは現代の子どもたちの育ちが変わってきたという認識が共有されてきたことが大きな原因だろうと思います。

かつては、時代が移り、社会が変わっても、子どもの本質は基本的には変わらないということを、教師や教育学者



など教育関係者は——それも良心的な人たちはど——前提にしていました。しかし、ここ数年の間に「子供が変わってきたのではないか」という共通の認識が生まれ、それが続々と学会が設立される時代的背景になっているのだろうと思います。

私自身のことについて申し上げますと、私の本来の仕事は教育社会学で、基本的には社会学をベースにした学問に携わってきています。教育社会学会のメンバーは、大ざっぱに言うと、子どもが次の時代の社会の担い手になるために必要な資質、能力をどう身につけていくのか、いわば社会化のプロセスを主要な研究のテーマにしてきているわけです。

進んだ「他者の喪失」

人間というものを考えるとき、私は、単に生物としての人間を見ていただけでは理解にならない、人間を深く理解するためには社会を深く知らないといけないし、同時に文化を深く理解しないとけないと思っています。別の言い方をすれば、社会をきっちりと理解するためには人間と文化について知らないといけないし、文化についてきちんとした理解をするためには人間と社会について知らないといけない。そういう意味で、この3つを三位一体として考える形で研究をしてきたわけです。その私の興味、関心からすると、1980年前後あたりから、明らかに子どもたちの育ちが変わってきているのではないかと実感しています。

私が最も衝撃を受けたのは、1983年に横浜市の山下公園で浮浪者をなぶり殺しにした10人の少年たちの供述です。彼らは、公園にいた——あるいは公園にあったと言った方が正確かもしれませんが——黒い汚物を処理してあげたのに、なぜとがめ立てを受けるのかというようなことを話しています。近づいたら嫌な匂いがしただろうし、見かけはそれこそ黒い塊でしかなかったかもしれませんが、それでも切れば血の出る人間だった。その人間を少年たちはものとしてしか見られなかった。

ナイフで傷つけば赤い血が出たはずですし、触れば体温を感じたはずですが、そういう、人間を物としてしか見られないような感覚が相当強まってきているのではないかと。私は、同時代人として生きている若い世代が、一体どういう育ちをしてきているのかということを真剣に考えなければいけないという思いから、『子ども再考ノート』をつくって自分なりに観察し、関連した記事を集め、論文を読み、さまざまな形の調査もしながら今日まで来たわけです。

その最初の段階で、論文を書いたり、本にまとめたりしたときに使ったキーワードの一つが「他者の喪失」です。

いまの子どもたちは、「他者」、自分以外の人間を喪失しているということです。他人を自分の中に取り込む作業が、社会化のプロセスの中で著しく阻害されているのではないかと。ひらたく言えば、他人のことを我がことのように思える状態で自分の中に丸ごと取り込むということが困難になってきているのではないかと。そういうことを「他者の喪失」という言い方で説明してきたわけです。

併行して進んだ「現実の喪失」

もう一つのキーワードは、「現実の喪失」、リアリティーの喪失が進んでいるということです。この社会がどう意味づけられているか、その意味づけを共通の認識にしないということです。大人の世代と若い世代、子どもの世代との間に、自分が生活している実際の生活の場について共通の認識を持てなくなっている、そうしたことが確実に進んでいると考えたわけです。

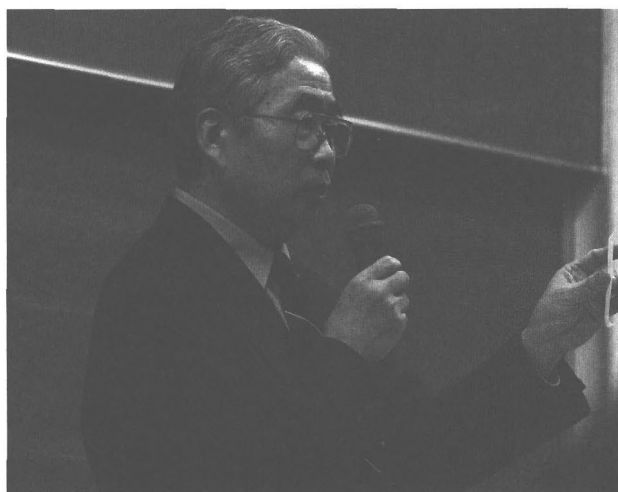
例をあげれば、同じ言葉でも状況についての認識——社会学では「状況の定義づけ」という専門用語を使っているわけですが——が違えば、言葉の意味はまったく違って解釈されます。

たとえば、学校の教室はどのように意味づけられた場所なのかということについて、多くの大人や先生方は、学問をする場、勉強する場というふうに定義づけをしています。

ところが、生徒の中には、友達と交流する場とか、牢獄と同じ、といった定義づけをしている子どもも少なからずいます。そうした違いがあると、先生の「頑張りなさい」という励ましの言葉を、「お前はダメな奴だ」と受けとめる生徒がいてもおかしくありません。また、実際にそういう生徒がいるわけです。要するに、同じ言葉でも、使われる状況についての意味づけや解釈が違っていると、まったく違う意味で理解され受け止められることが起こるということです。

実は、岩波新書の『子どもの社会力』を書くとき、最初は「社会性をはぐくむ」というようなタイトルを考えておりました。ところが、私の考えている「社会性」は、心理学者たちが使っている「今ある社会に適応するという意味での社会性」とはどうも違うということに気がきました。私が考えていた「社会性」とは、いまある社会に適応するというより、生成的な、よりましな社会につくり変えていく資質や能力だったのです。

当然のことながら、社会がよく維持されるためには、次の世代が、そのような資質や能力を備えていないといけないわけです。ところが、社会の大きな変化の中で、子どもたちにそうした資質や能力が育っていない。それを育てる



営みがなくなっているのではないかと考えました。こうして調べていくうちに、大人から青年へ、青年から少年へ、少年から幼児へと遡っていった、とうとうゼロ歳児にまでたどり着かざるを得なかった。そんなわけで、岩波新書では、大半を新生児について書くことになりました。

社会的動物であるとは、社会力があること

最近、私は、この学会の発起人のお一人でもある産業技術総合研究所の仁木さんと共同研究者になる約束をしたところです。なぜ社会学者である私がそんな分野にまで入り込んでいこうとしたのかということ、少し具体的にお話ししたいと思います。

私は、子どもの世界で「他者を喪失する」とか、「現実（リアリティー）を喪失する」とか、その結果として「社会力」を衰弱させるような事態が進んできた最大の原因は、他者すなわち自分以外の人間に関心を持つということが、ゼロ歳児からの育ちの段階で著しく阻害されてきたことにあるのではないかと考えています。

人間は社会的な動物であると言われてはいますが、社会的な動物であるための最も重要なポイントは、自分以外の人間が存在するということを確実に意識する、そして自分の周りにいる他の人たちに対する関心を持つということです。「何々ちゃん、一緒に何かやりましょう」などというようなことを言ったりやったりしながら他者への理解を深める。理解を深めると、共感がつのる。すると、感情移入することができるようになって、相手の身になって物を考えることができる。そのことが、ひいては他者への愛着となり、信頼感を培うことになります。

しかし、1960年代頃から高度成長が始まると、大きく変わる社会環境に急速に適応しようとして、子どもは他者への関心、愛着、信頼感といったものをどんどん薄れさせていった。そう考えているわけです。そんなことで、『子どもの社会力』を書き、『社会力が危ない』をまとめ、『学校の社会力』を出して、まもなく『親と子の社会力』が同じ朝日選書から出ます。柳の下に、何とどじょうが5、6匹もいたというか……（笑）、それでもまだ足りなくて、『社会力』に関する本を、あと2冊は出さないとはいえないと思ってます。

そのうちの一冊は、人間が社会的な動物になるということとは、すさまじく高度な能力を身につけることなのだというのをできるだけ具体的に書くつもりです。そして、もう一冊は、仁木さんたちとf(ファンクショナル)MRIなどを使ってさまざまな実験をしながら、社会的な動物になるということは脳のどの部分が鍛えられているかについて、その証拠をできるだけ多く提示したい。そうした証拠をもとに、できれば仁木さんとの共著をまとめたいと願っています。

急速に進む「非社会化」現象

なぜ私がそんなことを必死になって考えているかといえば、現在の日本で進行しているのが、明らかに「非社会化」という事態だからです。

具体的に言えば、まず学齢期では、いじめ、不登校、学級崩壊などで、就職期になると学卒無業者の増加です。学卒無業者は現在、高校、短大、大学で30万人以上になっているといわれますし、引きこもりはもっと増えています。厚生労働省の推計によれば100万人、引きこもりの子を持つ親の会の調査によれば、160万人と発表されています。

さらに、適齢期になっても結婚をしない人たちも増加中です。こうした人たちを「パラサイト・シングル」と呼んでいる社会学者、私の友人の一人でもある東京学芸大学の山田さんの推計によれば1080万人もいるといえます。

社会にいる自分を滅却したいということで、薬に手を出す人たちもいます。薬物依存者は、その人たちの社会復帰のためにDARC(ダルク)という民間施設をつくった近藤さんによれば1000万人を下らないといえますし、覚醒剤乱用者だけに限定しても、文部科学省によれば、250万人～260万人と推計しています。

また、つい最近もネット自殺が話題になりましたが、自殺願望者も相当います。10年前に『完全自殺マニュアル』という本が出版されましたが、朝日新聞社に最近調べてもらったところ、1999年の段階で約130万部も出ているとのことでした。このほかにも『女子学生堕落マニュアル』だとか『女子高生不良読本』とかいった本も出版されています。どれも社会とまっとうに関わろうとしない点では同じで、非社会化現象として括っていいでしょう。

以上ご紹介したような現象は、すべて社会力の喪失、非社会化、他の人たちと関係を持つことが辛い、イヤだという心性（メンタリティー）あるいは性向（プレディスポジション）のあらわれではないでしょうか。

岩波新書の中では、フツーの子どもの自閉症化が著しく進んでいるのではないかとということも書きました。ADH

Dやアスペルガー症候群が病気かどうかということはまだ医学の分野でも見解が定まってないと思いますが、私は後天的な要因の方が強いのではないかと考えています。ともかく、そういう子どもも含めたフツーの子の自閉症化が進んでいる。他人に関心がない、他の人のことがまったくわからない、という子どもたちがどんどん増えているのではないかと考えているわけです。さらに言えば、子どもの自閉症化はゼロ歳児あたりから、進んでいるのではないかと考えています。

人造人間アシモ君に及ばぬヒトの子

昨年、本田株式会社のアシモ君という最先端の人間ロボットをつくりました。その能力ですが、ホンダのアシモ君の宣伝文を私なりに整理すると、次の5つないし6つだと思います。

(1) 人の顔が識別できる。(2) ほかの人の表情や動作を読み解くことができる。(3) 環境に応じて自律的に行動することができる。(4) 情報を収集し、それを自分で分析し解釈できる。(5) 自分の解釈に基づき適切に行動できる。そして6つ目をあげれば、新しいさまざまなことに挑戦することができることです。

最後の一つを省いた1番から5番までの能力は、まさに社会的な動物の持つ能力だろうと思います。それに比べ、いまの子どもたちはどうでしょうか。

日立家庭教育研究所の土谷みち子さんたちが小児科のお医者さんの協力を得てまとめた調査では、1日3時間以上テレビを見ていて外遊びをほとんどしないという子どもたちには、次のような特徴があるとしています。

表情が乏しい、気持ちが通わない、友達関係が持てない、ほかの子どもが近寄ると逃げる、避ける、自分の殻に閉じこもっている、他人の動作をまねすることができない、声や音に反応しない、指さししない、言葉をかけても無視する、保母やほかの子が遊んでいたりと歓声をあげたりしていても振り向こうとしない、運動神経が鈍い、言葉が遅れる、視線が合わない。さらに、指さしをしても指先にあるものを追わない、自分から話しかけようとしない、声を出すことが少ない、話に抑揚がない、場面にふさわしくないことを言う、簡単な質問にもほとんど答えることができない……。

こうした調査結果を見ると、アシモ君の方がはるかに立派じゃないかということになります。この調査対象は3歳児ですが、私たちは一体なぜそういうふうになるのかということを実際に調べなければいけないのではないかと考えているわけです。

ヒトの子の高度な能力が意味するもの

先ほどから強調している、他人、自分以外の人間に関心を持つということをどのような言い方をしたら皆さんにわかってもらえるかということですが、ソーシャルベースト、社会的な糊(のり)という言い方がわかりやすいかもしれません。

糊っ気がある子ども同士が出会ったら、その関係を断ち切るというようなことはない、何らかの関係を必ずとっていくわけですね。しかし、糊っ気がない子ども同士は、先生やお母さんが「仲良く遊びなさい」と言って見ている間は仲良くしているけれど、そうした外からの圧力がなくなると、スッと離れていく。そして再び会うということをしてない。そういう現象が、いま全国で起こっているのではないかというのが私の見方です。そして、なぜこのようなことが起こるかを知りたくて、ゼロ歳児のことまで調べるようになったわけです。

たとえば、赤ちゃんに同世代の子どもの顔を見せた時と大人の顔を見せた時では、どちらの方により関心を示すかという実験が多くの研究者によってなされています。赤ちゃんは、圧倒的に後者、大人の方に注目します。もちろんその前提には人の顔が何であるかということを識別する能力があるんですが、そうしたさまざまな能力をつき合わせて考えると、赤ちゃんには大人と関わりたいという欲求があり、しかも関わることを可能にする高度な能力が先天的に備わっています。

ヒトの子は、そうした高度な能力を発揮して社会的動物としての資質能力を育てていくことになるわけですが、こういった実験をしたら「社会的動物になることはきわめて高度な資質能力を習得することなのだ」ということを確かめられるか……。そう簡単なことではないと思いますが、私は仁木さんたちとさまざまな実験のデザインを考えながら、そのことを証明する確かな証拠を示していきたいと考えています。

社会脳仮説の重要性

最後に、携帯電話を例に、もう一つ話をします。

サル学者の京都大学の正高さんが『携帯を持ったサル』(中公新書)という本を出しています。この本に、頻繁に携帯を使っている女子学生と、携帯を持っていない女子学生、それぞれ25人に集まってもらって実験をしたことが報告されています。

時間がないので簡単に話しますが、前者は明らかに利己的な人間、自分以外の人の都合を考えない人間になってい

て、そのために不利益を自らこうむる結果にもなっている。また、後者は明らかに利他的で、自分以外の人のことも考えながら普段の行動をしている。そういう結論を出しているというのを書いてあります。これも、重要なファクトファインディングではないかと私は思っているわけです。

基調講演で佐倉さんもおっしゃっていましたが、人間の最も人間らしい重要な特徴は、互惠互助というか、他の人と何らかの関係を保ちながら社会をつくり営んでいくということです。そのために、人間の脳は、かくも大きくなってきているのだと思います。北海道大学医学部の澤口さんたちはそのことをソーシャル・ブレイン・ハイポセーシス（社会脳仮説）ということで説明をしていますし、ソニーコンピュータサイエンス研究所の茂木健一郎さんは、さらにズバリ、「人間の脳は社会的動物になる、あるいは社会的動物であるということを前提につくられている」とまで言っているわけです。

社会的な動物になる、すなわち私の言葉で言えば、「社会力のある人間になる」ということは、社会をつくり、社会生活を営むために必要な、実にさまざまな、しかも極めて高度な能力を次々に身につけていくということなのです。

私たちは、他の人の表情を読み取って、いま、その人がどんな感情を抱えているかということ判断することができます。また、自分の目の前にいる人がいま何を考えているか、何を意図しているかを言い当てることもできます。さらには、状況に応じてコトバの意味を的確に読み取り、適切にコトバを交わすこともやすやすとできます。

人間は、そういう能力を駆使しながら、他人（ひと）と適切に応答し、いい関係を維持し、日々の生活を営んでいるわけです。これは、相当に高度な能力です。私はそのことを言い続けてきたわけですが、さらに仁木さんたちと共同研究することで確かな証拠を突きつけていきたいと思っているわけです。

社会力こそが学力を向上させる

最近、百マス計算をすれば成績が良くなるとか、頭が良くなるなどと言われ、全国の学校でブームになっていますけれども、私に言わせれば馬鹿げたことです。正高さんも先ほどの本のあとがきで、いまの子どもたちに起こっている変化は、学力低下なんていう生易しいものではない。教育関係者が、子どもたちが百マス計算を繰り返すことで賢くなるなどと考えていたとしたら、それは大間違いだというようなことをはっきり書いています。

社会力をつける、あるいは社会的な資質、能力を高めることを優先する。そのことが学習意欲や学力の低下などの

いろいろな問題をカバーすることにつながっていく。そういう意味でも、仁木さんたちがこれまで研究してきている海馬の働き、エピソード記憶という重大なファンクションを、私たちはもっともっと認識しないといけないのではないかと思います。

自分で体験しながら、「あ、これはこういうことなんだ」というような、ある種の感動だとか、喜びだとかといった感情を伴って理解したことこそが、生きて働く学力・知識となるということです。また、そういう知識こそが長く保持され、問題や課題を解決するときに活用されるという事実を、私たちはもっと共通の認識にしないといけないのではないかと思います。

社会学者・門脇が、脳科学者・門脇になって（笑）、その成果を、近い将来、この子ども学会で発表できればよいなと思っています。

会場より質問

子どもが変わったとすると、早急に新しい教育プログラムを考えなければいけないのではないかと思いますのですが、いかがでしょうか。また、たとえば基本的な生活習慣だとか社会的なマナーだとか、そうしたものを身につけていけるプログラムが必要なのではないかと思うのですが、具体的な話があれば、ご紹介ください。

新しい教育プログラムとして一番参考になるのは、イギリスの中等学校レベルの必修科目として昨年の新学期から始まったシティズンシップ・エデュケーションです。要するに、僕も私も社会の一員なのだという自覚をもたせるための授業で、これはすぐにも応用できるだろうと思っています。すでに参考にして、やり始めているところも少なからずあるのではないかと思います。

それから、教育プログラムというよりも、子どもには、とにかくしょっちゅう他の人と交わる機会を多くして、他者に関心を向けさせることの方がもっと重要だと思っています。子どもが義務教育に入る前までに、意図的な教育が意図どおりの効果を上げるための下地をきっちりつくる。まさにここまで申し上げてきたソーシャル・ペースト（社会的な糊）だとか、他者への関心、愛着、信頼感みたいな、社会力のおおもとになる下地をきっちりつくる、そういうことの方がはるかに大事だと考えています。